マリンレスキュージャーナル

Vol 107 No 1
2015|1月号

CONTENTS

01 名誉総裁 年頭挨拶
02 公益社団法人 日本水難救済会 会長 年頭挨拶
03 海上保安庁長官 年頭挨拶
04 公益社団法人 日本水難救済会 理事長 年頭挨拶
06 連載 マリンレスキュー紀行
海の安全安心を支えるボランティアたちの群像
山形県水難救済会 念珠関救難所/温海救難所
12 全国地方救難所のお膝元訪問
ニッポン港グルメ食遊記【念珠関救難所】
13 青い羽根募金活動レポート2014
平成26年度「青い羽根募金」の状況
命を繋ぐ"輪"ライフリングプロジェクト(救命浮環設置事業)
17 水難救済思想の普及活動レポート
21 マリンレスキューレポート
Part1 救難所NEWS 海難救助訓練ほか/水難救助等活動報告
Part2 洋上救急NEWS 洋上救急活動報告/洋上救急慣熟訓練
31 レスキュー41～地方水難救済会の現状(シリーズ)
愛知県水難救済会/青森県漁船海難防止・水難救済会
35 MRJ 互助会通信
39 MRJ フォーラム
理事会の開催/投稿:「平成26年度理事会・総会を「金刀比羅宮」で開催(香川県水難救済会)、
創立40周年を迎えて(公益社団法人 北海道海難防止・水難救済センター)
「公益社団法人 琉球水難救済会の新築事務所完成と旧事務所について」(公益社団法人 琉球水難救済会)
松前救難所が人命救助により名誉総裁表彰に続き紅綬褒章を受章/
山内甚一郎氏が名誉総裁表彰に続き紺綬褒章を受章
44 平成26年における日本水難救済会会長表彰受章者一覧
46 編集後記

表紙:山形県水難救済会 念珠関救難所

連載 マリンレスキュー紀行

海の安全安心を支える ボランティアたちの群像

山形県水難救済会 念珠関救難所 / 温海救難所

山形県水難救済会合同訓練で"もやい銃"を発射する念珠関救難所の救助員

"力を合わせて、命を守る" 北の海で受け継がれる精神

取材協力:念珠関(ねずがせき)救難所、温海(あつみ)救難所

漁業やレクリエーションの場として、多くの人に愛される山形の海

東北地方の南西部、日本海側に位置する山形県。県土の72%を森林が占め、蔵王山や鳥海山、出羽三山(羽黒山・月山・湯殿山)といった名峰が連なる。そして「母なる川」最上川が県内に広がる米沢・山形・新庄の各盆地と庄内平野を縦断し、日本海に流れ込む。

こうした恵まれた自然環境を背景に農水産業が盛んであり、米・さくらんぼ・米沢牛・岩ガキなど、全国的に有名な特産品も多い。山や海などの景勝地も豊富にあり、全市町村に温泉が湧くことから、この地ならではの食を楽しむとともに、自然を満喫し精神のリフレッシュや安らぎを得るために、年間を通じてたくさんの人が訪れる観光県でもある。

海は、そんな山形の産業と観光を支える重要な資源である。山形県における海岸線は全長約135.5km、ほぼ直線状に南北に伸びる。最上川河口部のある砂浜海岸を挟んで、北部・南部には岩礁が広がる。北部の岩礁海岸は鳥海山の溶岩が海に流下してできたものであり、一方、南部の岩礁海岸は出羽山地が海岸部まで続く浸食段丘となっている。これらの岩礁域では切り立った岩場が海岸に迫り、細かく複雑に入り組んだ海岸線が磯と調和して見事な景観を形づくっている。

最上川を筆頭に、赤川、月光川など流入する河川がたっぷりと栄養分をもたらし、海の生物は豊か。また、対馬暖流や冬季風浪によって暖水域・冷水域が出現するため、寒暖両系の種が生息し、海中では多様で豊富な水産資源が育まれている。

海洋レジャーでも人気の地域で、海岸部のほぼ全域に海水浴場が点在し、岩礁部では釣りやスキューバダイビング、沿岸部ではサーフィンやボードセーリングを楽しむ人々が県内外から訪れる。

今回取材班は、この山形の海で海難救助活動を展開する2つの救難所を訪れ、ボランティアの方々にお話を伺った。

念珠関救難所

▲念珠関救難所の皆さん（左から佐藤栄松さん 佐藤清紀さん 佐藤勝則さん 佐藤誠さん 飛塚裕実さん）

94名の大所帯で海難救助活動を展開

海岸線に沿って伸びる国道を目的地に向かって走ると、車窓からは海の様子を間近に眺めることができた。重厚感ある灰色に立ちこめる雲の下、どこまでも広がる日本海は全面が白く染まるほどに荒れ狂い、うねりが大きな波となって陸に押し寄せ、岩礁にぶつかっては波の華を散らして砕ける。取材日、山形県沿岸部には強い風が吹き付け、伴う雨には時折大粒の雹が混じった。

今回紹介する2救難所は、どちらも山形県西部に位置し新潟県に隣接する鶴岡市に所在している。最初に訪れたのは念珠関（ねずがせき）救難所。山形県漁業協同組合念珠関総括支所に救難所が置かれているが、悪天候の中、6名の救助員の方が取材班を迎えてくださった。

「念珠関救難所の救助員数は現在94名。そのほとんどが漁業関係者です」と救難所長を務める佐藤清紀さん。漁業を営んでいるわけではないが、自身で船を持ち海難救助活動に参加している救助員も4～5名いるそうだ。

担当するエリアは、主に鼠ヶ関港を中心とする海域。しかし、要請があればどこへでも出動する、と庄内弁混じりでゆっくりと佐藤救難所長は言う。「沖へ出ていて仲間に何かあったら、すぐにでも駆け付ける。その精神は、海で漁を営み海難救助活動に参加する、この救難所の救助員全員の心に根付いています」

▲取材日の念珠関周辺。強風の中、海面は凄まじい勢いで荒れ狂っていた

経験の浅い漁業者の遭難を速やかに発見して救助

念珠関救難所がこれまでに出動した事案の多くが漁船絡みのもの。しかし平成23年8月25日に発生した漁船の転覆事故は、少々事情が異なっていた。

サザエ刺網漁を行っていた事故船は、その日の22時30分頃、網揚げのために出港。沖合200m付近の漁場で巻揚げ機を使って張っていた網を引き揚げていたところ、加減を誤って根がかりしてしまった。乗員は船を前後に操作して網を外そうとしたがうまくいかず、そこに後方から波を受けたことで転覆してしまった。

▲念珠関救難所救難資材器具倉庫。横には救助員名簿も

「実は、この遭難者はもともと学校の先生をしていた方。漁業の経験が浅くて巻揚げ機の使い方も船の操縦法も熟練しておらず、それが事故につながったと思います」救助に携わった佐藤勝則さんが状況を説明してくださった。

しかし同じ頃、漁船「海栄丸」であなご漁に出ていた念珠関救難所の救助員・本間鋼太郎さんが、事故後ほどなくして船の転覆に気づき、遭難者も発見。速やかに救助し、遭難者を乗せていったん港に戻った。

その後、海栄丸は再び事後現場に戻り、刺網を切って事故船を離脱させた。手を加えると沈没する可能性もあったため、転覆状態のまま港まで曳航し、係留してその日の救助作業を終えた。夜が明けるのを待ち、翌朝5時20分頃、今度は漁船「第2長盛丸」が現場に向かい、網を回収。9名の救助員が集まり、8時30分頃から事故船を陸に引き揚げる作業を行った。なお、遭難者の発見と救助を行った本間さんには、後日、第二管区海上保安本部長より感謝状が贈呈された。「事故現場は岩場が多いところで、発見されるまで時間がかかれば遭難者もケガをしたり、波に打ちつけられて命を落とす可能性だってありました。スムーズに救助活動が行われたことは本当に不幸中の幸いだったと思います」と佐藤勝則さんは振り返った。

▲遭難者を救助し、久門海上保安部長（当時・左）より感謝状が贈呈された救助員・本間鋼太郎さん（中央）

2救難所が協力して浸水漁船の沈没を防ぐ

先述の事故は遭難者が漁に慣れていないことが事故発生の大きな要因となったが、熟練の漁業者であってもふとしたことで事故に巻き込まれる場合がある。平成25年7月29日の漁船浸水事故は、まさしくそんな事例であった。

その日の深夜1時頃、事故船は延縄漁のため、仲間の船とともに出港。その約1時間後、鼠ヶ関沖約6kmのところで機関室が浸水していることに乗員は気づいた。「冷却水を取り込むための配管が破損していたようで、エンジンをかければかけるほど状況が悪くなった。最初は自力で港に戻ろうとしたが、どうしようもなかったようです」と佐藤救難所長は言う。遭難者は近くを走る仲間の船「勇山丸」に曳航してくれるよう頼んだものの、浸水は止まらない。沈没するのではないかと危険を感じ、やはり同走していた僚船「大進丸」に救助を求めて乗り移った。

▲豊富な経験をもとに的確な判断を下す佐藤清紀救難所長

▲落ち着いた物腰が頼もしい、佐藤勝則さん

救難所長を含めた幹部は、その日は休漁しておりそれぞれ自宅にいた。遭難者は救助されたものの事故船が沈没する可能性もある、という現場からの連絡に、救難所長・副所長・救助長の三役で協議した結果、陸にいた救助員たちにも出動を要請。現場に居合わせた救助員には排水用のポンプを取りに帰港するよう指示を出し、自分たちも出動した。現場には、沈没防止用のフロートを用意した温海救難所（後述）からも救助員が駆け付けており、念珠関40名と温海9名の皆で事故船にフロートを取り付けるとともに排水作業を展開し、沈没を防ぐことに成功。午前4時50分、念珠関救難所の救助員が操る漁船「大洋丸」が事故船を曳航し、港に戻った。

夜通しの救助活動となったが、遭難者の命に別条はなく、皆の協力で事故船のダメージも抑えることができた。「事故船はその後エンジンの整備を行い、今では元通り、漁にも出ていますよ」と副所長の飛塚裕実さんは晴れやかに笑った。

課題は海洋レジャーの絡む事故。海の安全の確立に向けて

団結力で海の安全と人命を守り抜いている念珠関救難所の救助員たちを最近悩ませているのが、レジャーのために海を訪れる人々の存在である。平成25年6月24日には、大型ヨットが定置網に乗り揚げた事案が発生している。

事故船は日本一周旅行を試み、岡山県から北海道に向けて航行していたという。途中、鼠ヶ関港の近くにある県内随一の規模を誇る海洋レジャー基地・鼠ヶ関マリーナに寄港しようとした。ところが、土地勘がないうえ夕暮れで視界も悪化する中、航路がずれて定置網が張ってある漁場に差し掛かってしまったようだ、と佐藤救難所長は語る。「スクリューに網が絡んでにっちもさっちも行かない状態。118番通報を受けた酒田海上保安部から要請され、念珠関救難所の救助員が所有する船2隻で救助に向かいました」2名の乗組員は無事だったものの、北向きの風が強く日没も迫っていたため、漂流防止の船固めをしてその日の救助は終了。翌朝早くから45名の救助員が出

▲取材日の鼠ヶ関港。奥には防波堤にぶつかって砕ける大波が見える

▲明るく活気のある雰囲気で救助員を引っ張る、飛塚裕実副所長

動し、何人かが潜水してスクリューに絡まった網を切ってヨットを離脱させた。同時に網も引き上げて後日張り直したため、「定置網漁への影響は大きかった」と佐藤誠さんは苦笑した。

今年はゴムボートの破損事故が同じ日に2件続いた時もあったそうだ。地元テレビ局が番組で釣りの好ポイントとして紹介したことから、海上でカヌーやカヤックを目にすることも増えたという。「岩場に囲まれたこの海域にゴムボートは適しません。今年の事案も、ボートの底を岩に擦って穴が開いたことが事故原因となりました。それに、ゴムボートやカヌー、カヤックは、海面が波立っていると視認しにくい。レーダーにはっきり映らない時もあるので、衝突事故でも起こさないかと船を操っていてひやひやします」と佐藤栄松さんは嘆く。

幸運なことに、まだ人命が絡む事故は起きていない。だから今のうちに、と念珠関救難所ではレジャー利用者に安全への意識を高めるよう呼びかけるとともに、ルールや規制の確立に向けて山形県や鶴岡市などに働きかけを行っているという。

▲鼠ヶ関港からほど近くにある海岸。車の乗り入れができるため、ゴムボートやカヌーなどを出す利用者がよく見られる

厳しい北の海で
着実に人の命を守り続ける

一方、漁船に関しては、乗員の急病による事案が増えているという。平成25年10月22日には、出漁中の漁業者が脳内出血により落水する事故も起きた。同時刻に操業していた僚船が無人となった船に気づき、遭難者を引き上げて応急処置を施し陸に搬送。救急車に引き継いだものの、残念ながら収容された病院で死亡が確認されたそうだ。

けれど遭難者を家族のもとにかえすことができてよかった、と佐藤救難所長は言う。「救命胴衣を着けていたため、転落したものの海面に留まることができた。見つからなければ、仲間全員が漁を休んで捜索に当たることになります。ですから私たちは、自分の命はもちろん仲間のためにも、海に出る時は救命胴衣を着けることをルールにしています」

▲ジェットスキーも増えてきた、と語る佐藤栄松さん

出動事案について話を伺っていると、夜間に事故が発生した場合はまず人命救助、沈没などの恐れがなければ事故船の曳航や回収は夜が明けてから行われることが多いと気づかされる。「命が第一。それさえ助かれば、船などの財産はどうにかなる」と佐藤救難所長の口調に迷いはない。荒れやすいこの海で生きてきた経験から、そうしたセオリーが育まれていったのだろう。

海や地形の特徴を知り尽くしているという誇りを胸に、仲間と、海を訪れる人の命を何よりも大切にする。男たちの優しさが、飾り気ない言葉の端々に感じられた。

▲穏やかな口調の中に洞察力が光る佐藤誠さん

▲漁協青年部にも所属する本間金弥さん。普段ははえ縄漁に従事

▲出漁の時を待つ、鼠ヶ関港所属の漁船たち

▲鼠ヶ関海域で見られた「波の華」

温海（あつみ）救難所

▲取材に応じてくださった温海救難所の皆さん。年代層の厚さが顔ぶれからもうかがえる（左から佐藤優さん 奥井兼一さん 本間和憲さん 佐藤正幸さん 佐藤善昭さん）

80代から30代まで
幅広い年代の救助員が集まる

次に訪ねた温海救難所は、念珠関救難所から車で30分ほど北上したところにある。やはり悪天候が続く中、拠点とする米子漁港を臨む倉庫に5名の救助員が集まり、取材班を待っていてくださった。風と波の音を間近に聞きながら、早速お話を伺う。

「温海救難所は、この米子漁港を中心としたエリアで海難救助活動を行っています。所員数は33名で、全員漁業関係者。上は80代から下は30代まで、幅広い年代の救助員が集まっています」救難所長の佐藤優さんは語る。

拠点が近く漁場も重なるため、念珠関救難所と協働で救助活動を展開することもある、と副所長の奥井兼一さん。例えば、先に紹介した平成25年7月29日の漁船浸水事故では、温海救難所の救助員9名が現場に応援に向かった。「ちょうど事故現場に居合わせた温海救難所の救助員からうちの救難所長に“浸水した事故船が沈没しそうだ”と連絡が入ったそうです。フロートを使いたいと要請があったため、温海救難所で準備し6隻の船を出して出動しました」救助活動に携わった本間和憲さんがその時の様子を話してくださった。

▲救助に使用したフロート。大型で、事故の際は皆で協力して保管所から引き下ろした

▲温海救難所が置かれている県漁業協同組合温海出張所

「事故が発生したのは深夜でしたが、夏だったこともあり天候も海の状況もそれほど悪くはなかった。温海と念珠関の救助員が50名近く集まり、力を合わせたおかげで、4トンの事故船にフロートを取り付ける作業も思った以上にスムーズに進みました」遭難者にも事故船にも大きなダメージがなかったのは先述の通りである。所属する漁協支所や救難所は異なっても、海で一緒になればすぐに力を合わせて作業できる。海の男の団結力を伺わせるエピソードである。

地道な活動で
海の危険から人々を守る

温海救難所では近年、漁船絡みのものよりも釣りなど海洋レジャーの事故で出動するケースが多いそうだ。

▲「救助員の命を守ることも私の役目」と語る佐藤優救難所長

「この海域は殊に波が荒く、防波堤を超えて押し寄せることも珍しくありません。数年前には、防波堤で釣りをしていた人が波にさらわれる事故が起きています」と佐藤救難所長は言う。要請を受けて温海救難所の救助員全員で遭難者を探したものの、その日見つけることはできなかった。翌日、今度は潜水をして捜索したところ、海中で発見することとなったという。

また、ゴムボートやカヌー、カヤックで海に出て釣りをする人が後を絶たないことも、温海救難所の悩みの種となっている。「そもそも漁港からこうしたボートを出すこと自体が認められていないのですが、そうでなくて

▲水難救済会の制服・帽子を着用し使命感旺盛な奥井兼一副所長

▲飾らない雰囲気が魅力の本間和憲さん

▲米子漁港に設置された看板。効果は絶大で、ボート等の事故も起こらなくなったそう

もこの辺りでは、陸で風を感じない時でも沖では吹いていて、早い波が押し寄せてくる気象現象が起こることがあります。知識や経験のない方がきちんとした準備もせずに海に出てしまうのはとても危険です」状況を話してくださる佐藤正幸さんの言葉に、佐藤善昭さんが付け加える。「我々が漁に出ていて、“風が来た”と無線などで情報を得た時には、周りのボートに注意を促し“戻るのに時間がかかるようならば港まで曳いていってあげますよ”と声をかけることもあります。見知らぬ人であっても、やはり事故には遭遇してほしくないですから」

とは言え、明らかに危険であるものをそのままにしているわけにはいかない。温海救難所の救助員が所属する漁協温海出張所では、米子漁港を管理する山形県に申し入れて、ボートの利用ができないことを告知する看板を港に立てたそうだ。これが功を奏し、看板を設置した今年はボート利用者の事故は発生していないと佐藤所長は語った。

▲若手ながら重厚で頼もしさを感じさせる佐藤正幸さん

▲記者の質問に、すぐに的確な答えをくださった佐藤善昭さん

訓練経験とコミュニケーションで救難技術の継承を図る

若い年代の漁業者も多数救助員となっている温海救難所では、これからも息長く活動を行い地域の安全を守れるよう、救助技術の継承に力を入れているそうだ。「しかし、出動の機会がない限り、熟練者が持つ技術を若年者に伝える場がありません。そこで活用しているのが救助訓練の場。鶴岡市では毎年、市救難本部と市内5救難所が集まって訓練を行っていますし、5年に1度、県内11救難所による合同訓練も実施されています。ここで若い世代に、救助技術とともにボランティア精神を体得してもらっています」と佐藤救難所長。奥井副所長は「救助員同士のコミュニケーションも大切にし、親睦会などでこれまでの出動事例についてもよく話しています」と微笑む。「なんといっても、実体験で学んだことが一番役立ちます。後進にもこうした“知恵”を積極的に吸収してほしいと願っています」

こうした先達たちの思いは着実に受け止められ、昨年、競技形式で行われた県の合同訓練で、若手が中心となった温海救難所チームは総合3位の好成績を獲得。技術力と団結力がしっかりと育まれていることを示した。

同じ海を舞台に活動する救難所同士が力を合わせ、海の安全を守る。そしてその技術と精神が、次の世代へと確かに引き継がれていく。雄大に躍動する日本海を眼前に臨む地で出会ったのは、そんな心温まる、そして未来への希望を感じさせる男たちの姿であった。

▲県の合同訓練で総合3位を獲得し、授与された賞状

▲米子漁港にて、憩う漁船たち

▲激しく押し寄せ、防波堤を超える波

全国
地方救難所のお膝元訪問

ニッポン港グルメ食遊記

**このコーナーでは、各地の海の「旨いもの」をご紹介しています。
今回は、念珠関救難所の救難所員御用達、
「浜のカーチャン料理」で人気の、ある民宿を訪ねました。**

鮮度、味、量。すべてにもてなしの心を込めて

民宿丸武
（鶴岡市鼠ヶ関）

海の近くにたたずむ、趣ある木造の建物が「民宿丸武」。お伺いすると、ちゃきちゃきとした明るい物腰のおかみさん、佐藤有記さんが出迎えてくださいました。通されたお座敷の大きな座卓には、目移りするほどの品数の料理が……!

「刺身に焼きもの、天ぷら、煮付けは基本。魚の旬や、その日の仕入れ状況を踏まえて献立を考えています」と有記さん。この日のお刺身はタイにヒラメ、エビ、表面をあぶったワラサ。どれも新鮮、そしてたっぷりと脂が乗って口の中でとろけるよう。焼きものは温かいまま提供するのが丸武のこだわり。焼き立てのタイはふっくらとして香ばしく、大きな1尾がすぐに記者のお腹の中へ。そして、ここならではの珍味がハタハタのたまご。すった長芋と合わせてご飯に載せると、ご飯が進む、進む!

この民宿は、近くにある「丸武鮮魚店」の直営。新鮮な魚をとびきりの料理に仕立ててお客さまにお出ししている、とご主人の佐藤国光さん。鮮魚店では独自の製法でつくる「一夜干し」が好評。夜に行われる競売で買い付けた魚をすぐに処理して一夜干しし、冷凍しているので、鮮度が保たれており、他の干物では味わえない香りや食感の良さが自慢とのこと。

料理目当てのリピーターも多いという民宿丸武、そして一夜干しはもちろん採れたて鮮魚の発送もしている丸武鮮魚店で、日本海の美味を堪能してみてはいかがでしょうか。

（お問い合わせ）
民宿丸武／0235-44-2185
丸武鮮魚店／0235-44-2265
（民宿丸武　所在地）
山形県鶴岡市鼠ヶ関乙208-23 〒999-7126

この日のお刺身。身の透明感からも鮮度がうかがえる

焼きもののタイ。塩加減も絶妙！

ズワイガニも地元で獲れたもの

珍味ハタハタのたまご。コクとこってり感がたまらない

丸武鮮魚店自慢のイカの一夜干し。あぶると最高！

おもてなし精神旺盛な店主、佐藤国光さん